

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.253

2014年6月

バンコク事務所開所記念式典を挙



目次

●ニュース

バンコク事務所開所記念式典を挙	3
第7回 AC21国際フォーラム2014を開	4
名誉教授称号授与式・懇談会を開	6
市橋副総長がウズベキスタン政府主	6
東京オフィス開所式を挙	7
平成26年春の叙勲・褒章受章者決	7
下駄の鼻緒奨学金授与式を挙	8

●知の未来へ

X線CT検査における患者の被ばく線	9
藤井 啓輔 (大学院医学系研究科助	

●知の先端

近未来型モビリティのすがた	10
森川 高行 (大学院環境学研究科教	

●キャンパスクローズアップ

減災館 (Disaster Mitigation Research	12
-----------------------------------	----

●部局ニュース

第2回 ITbM 国際シンポジウムを開	14
工学研究科コミュニケーションデザ	15
ダン・シェヒトマン特別教授による	15
環境学研究科附属持続的共発展研	16
東海圏減災研究コンソーシアム第	16
第101回防災アカデミーを開	17
ICCAE2014年度第1回オープンセ	17
ICCAE2014年度第2回オープンセ	18
ミクロの探検隊®を開	18

●本学関係の新聞記事掲載一覧	19
----------------	----

●INFORMATION

平成26年度名古屋大学公開講座	22
-----------------	----

●イベントカレンダー	24
------------	----

●ちょっと名大史

名大の学風「自由闊達」の語源	28
----------------	----

バンコク事務所開所記念式典を挙





1 開所式であいさつをする総長
2 開所式会場での記念撮影
3 テープカットの様子

名古屋大学バンコク事務所開所記念式典が、4月25日(金)、タイのチュラロンコン大学内において開催されました。

式典には、本学から、濱口総長、渡辺理事、市橋副総長をはじめ、関係部局から教職員が出席したほか、全学同窓会タイ支部長であるアピナンスプラサート カセサート大学獣医学部長、学外からも、在タイ日本国大使館の佐藤重和特命全権大使や、ピロム・カモンラタナクン チュラロンコン大学長、シリー・チャイセーリー カセサート大学副学長等、協定校からの来賓、さらには国際連合教育科学文化機関 (UNESCO) や国際連合食糧農業機関 (FAO) 等の国際機関、在タイ日本企業関係者など、90名を超える方々の出席がありました。

式典冒頭、総長が、これまでの協定校を中心とした学術交流や、AC21(国際学術コンソーシアム)を通じての大学間の協働について言及し、事務所の開所を契機として、今後、国際機関や企業等との連携や、学問分野を横断するような、より多様で重層的な交流を



促進していくことが表明されました。併せて、周辺国の日本法教育研究センター (ベトナム、カンボジア、ミャンマー、インドネシア、ラオス) やベトナム フエの内視鏡トレーニングセンター等とネットワーク化を図り、東南アジアにおける交流の拠点としてバンコク事務所を機能させたいと期待を述べました。

名古屋大学バンコク事務所は、上海、ウズベキスタン、ドイツのヨーロッパセンターに続く本学4番目の海外事務所として、チュラロンコン大学石油・石油化学研究科のリサーチサー

ビスセンター内に開所しました。タイをはじめとする東南アジアからの優秀な学生のリクルートや、タイや東南アジアで展開しているキャンパス ASEAN (大学の世界展開力強化事業) や「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラム (博士課程教育リーディングプログラム) 等の活動支援、ASEAN の経済統合等変革の著しい東南アジアの情報収集と本学の情報発信等、全学の教育・研究を支援する拠点として活動を展開していきます。

第7回 AC21国際フォーラム2014を開催

第7回 AC21（国際学術コンソーシアム）国際フォーラムが、4月13日（日）から16日（水）までの4日間、南アフリカ共和国のケープタウン近郊ステレンボッシュにあるスピア・カンファレンス・センターにおいて、開催されました。本フォーラムは、メンバー大学であるステレンボッシュ大学がホスト校となり、AC21として初めてアフリカで実施されました。

AC21は、2002年に本学で開催された国際フォーラムにおいて、世界の教育・研究・産業組織による国際的な学術ネットワーク構築を目的として設立され、現在ではメンバー大学は11カ国20大学にのぼり、2年ごとの国際フォーラムや学生を対象としたイベント（学生世界フォーラムや国際スクーリング）の開催、国際共同研究の推進（助成金提供含む）、ワークショップの開催、国際産学官連携プロジェクトの実施など活動の幅を広げてきました。

AC21の主要イベントである国際フォーラムは、2002年に本学において第1回が開催されたのを皮切りに、2004年にオーストラリア シドニー大学、2006年に英国 ウォリック大学、2008年に米国 ノースカロライナ州立大学、2010年に中国 上海交通大学、2012年にオーストラリア アデレード大学で開催されています。第7回となる今回の国際フォーラムには、18カ国27大学から、メンバー大学の学長、副学長、教職員のほか、アフリカ諸国の大学関係者や学生、政府機関から約100名が参加し、活発な議論が繰り上げられるとともに関係者の交流が図られました。

「社会のための科学：希望をもたらす高等教育」をフォーラムのメインテーマに据え、5つのサブテーマ「次世代の研究者育成のためのネットワーク構築」、「高等教育とコミュニティ開発：社会のためのカリキュラム」、「高等教育



あいさつする総長

における教育・研究の流動性を通じたコミュニティ間の橋渡し」、「競争的産業：高等教育・研究・イノベーション」、「アカデミックトラック」が設定されました。

開会式では、ロバート・コツツェ ステレンボッシュ大学国際部長と濱口総長のあいさつがありました。コツツェ国際部長は、アフリカで初めて開催される AC21のイベントのホスト校として、歓迎の辞を述べました。総長は、地球規模の課題に対する解決策を見出すにあたり、科学の発達やイノベーションの創出が必要であり、そのためには、高等教育機関及び企業との国際的な連携が重要であること、そして、AC21はそのような連携強化において重要な役割を担っていることを強調しました。

フォーラムでは、ガリーブ・ゼッピー 南アフリカ共和国高等教育・訓練省国際関係部チーフ・ディレクター、ラッセル・ボットマン ステレンボッシュ大学学長、ハンス・ヨハン・シーバー フライブルク大学学長、パスカール・クエスタ アデレード大学副学長、アーノルド・ヴァン・ジール ケムニッツ工科大学長の5名による基調講演が行われました。



質問に答える総長



パネルディスカッションの様子



フォーラムの様子

また、「アフリカにおける高等教育機関の国際化ーアフリカ4大学からの視点」のテーマのもと、パネルディスカッションも行われ、マダガスカル、ケニア、ボツワナの大学の国際化の現状と課題について発表があり、会場から多くの質問が出され、活発な議論が展開されました。本学からは、今回、サブテーマに沿って2名がプレゼンテーションを行いました。

国際フォーラムに加えて、13日(日)午後には、AC21運営委員会が、15日(火)午後には、AC21総会が開催されました。また、運営委員会終了後には、本学とステレンボッシュ大学との間で大学間学術交流協定の調印式が執り行われました。

運営委員会では、まず、本学に設置されているAC21事務局の年次活動報告に続いて、AC21国際スクーリングの会計報告や第5回学生世界フォーラムの実施報告がありました。次に、運営委員会メンバーの半数改選の手順やAC21規約の変更、2018年に開催予定の第9回国際フォーラムのホスト校の選定方法、新メンバー大学のリクルート戦略、そしてニュージーランド カンタベリー大学のAC21加盟について議論が交わされました。その結果、運営委員会としては、カンタベリー大学のAC21の加盟を承認することが決定しました。また、その他の議題についても、AC21総会に付議することが承認されました。

総会では、AC21事務局の活動報告に続き、AC21国際スクーリングや第5回学生世界フォーラムの会計報告が承認され、次期運営委員会メンバー（任期は2014年総会から2018年総会まで）として、アデレード大学、ケムニッツ工科大学、フライブルク大学の3大学が決定されました。この3大学以外では、上海交通大学、ステレンボッシュ大学、ノースカロライナ州立大学（任期は2016年総会まで）と、事務局のある本学が運営委員会メンバーです。2018年の国際フォーラムのホスト校は複数立候補があり、投票の結果、中国 吉林大学に決定しました。また、総会において



ステレンボッシュ大学との大学間学術交流協定調印式での記念撮影



総会参加者の記念撮影

も、カンタベリー大学のAC21の加盟が承認され、同大学のAC21加盟が決定しました。新メンバー大学のリクルート戦略についても、活発な議論が交わされ、加盟大学がいない地域を中心にリクルートすることについて、今後も議論を重ねることとなりました。また、2015年4月に、フランス ストラスブール大学がドイツ フライブルク大学と協力して開催予定の学生世界フォーラムや、2016年にドイツ ケムニッツ工科大学で開催予定の国際フォーラム、2017年にインドネシア ガジャマダ大学で開催予定である学生を対象としたイベントの準備状況について、各ホスト大学から報告がありました。

定期的に行われるイベントに加えて、メンバー大学間でサブグループを結成して共同研究を行うなど、AC21が提供する国際的な学術ネットワークを有効活用する事例が増えてきました。メンバー大学間での情報交換やネットワークを円滑にする場を増やし、パートナーシップ強化とAC21の活動のさらなる充実を図っていききたいと思います。

名誉教授称号授与式・懇談会を開催

名誉教授称号授与式が、5月9日(金)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

名誉教授の称号は、本学教授として7年以上勤務し、教育上又は学術上特に功績のあった方等に授与するもので、今回新たに8名(新制計1,156名)の先生方に授与されました。

授与式では、今回出席された7名の新名誉教授に、濱口総長から辞令書が授与され、永年にわたり本学の教育・研



記念撮影

究の発展に多大なる貢献をされたことへのお礼と、お祝いのごことばが述べられました。続いて、新名誉教授を代表し、村田善晴名誉教授からお礼のあいさつがありました。

その後、シンポジウムホールにおいて、名誉教授懇談会が約100名の参加を得て開催されました。懇談会は、新名誉教授の紹介で始まり、昨秋からの叙勲等受章者、役員・部局長の紹介に続いて、総長からあいさつとこの1年の本学の動き等について報告がありました。その後、代表として森 正夫名誉教授から近況報告及び大学への助言等があり、続いて、野村浩康名誉教授の発声で乾杯が行われ、参加者は、終始和やかな雰囲気の中で懇談しました。

今回、新たに名誉教授の称号が授与されたのは、次の方々です。

大学院理学研究科	遠 藤 斗志也	
大学院医学系研究科	鳥 橋 茂 子	
大学院医学系研究科	中 島 務	
大学院工学研究科	生 田 幸 士	
大学院工学研究科	中 村 佳 朗	
大学院環境学研究科	大 森 博 司	
環境医学研究所	村 田 善 晴	
エコトピア科学研究所	大日方 五 郎	(敬称略)

市橋副総長がウズベキスタン政府主催の国際会議に出席

市橋副総長が、5月15日(木)、16日(金)の両日、ウズベキスタン共和国のサマルカンド市において開催された、ウズベキスタン政府主催の「現代の文明、学術、哲学、思想の発展に大きな貢献をした歴史上の偉大な人物、学者に関する国際学術実地会議」に出席しました。

まず、ウズベキスタン共和国イسلام・カリモフ大統領



アジモフ第一副首相(左)と歓談する市橋副総長(右)

の熱のこもった開会あいさつがあり、その後、各研究者によるプレゼンテーションが行われました。スライドを用いた1人当たり約20分間のプレゼンテーションは、ウズベキスタンの歴史にとどまらず、中国やエジプトなどの歴史も交えながら、広く展開されました。

16日(金)には、4つのセッションに分かれた分科会が行われました。それぞれの進行役のもと、多くのスピーチと忌憚のない議論が行われました。最後には、4名の進行役によるクロージング・セッションも行われ、本会は大盛況のうちに終了しました。

2日間にわたり行われた本会は、晴天にも恵まれ、またウズベキスタン政府の力のこもった進行もあり、会議の様子は同国の各メディアを通じて、広く世間に発信されました。今回の国際会議を機に、今後もより一層の交流と議論が行われることが期待されます。

東京オフィス開所式を挙る

名古屋大学東京オフィスの開所式が、4月24日(木)、東京駅に直結する立地に立つビルの11階において挙行されました。

本オフィスは、政府機関、研究機関、大学及び企業といった連携機関等との連絡調整、共同研究の強化促進、外部資金情報収集及び事業等広報発信、研究成果発信、マスコミ



記念撮影

取材などのアウトリーチ活動等、東京地区の活動拠点として、本学の開かれた研究活動等を積極的に展開するため、文部科学省「研究大学強化促進事業」の支援を受け設置されたものです。

式典では、濱口総長から「東京オフィスの活用により、更なる研究促進・情報発信に邁進したい」とあいさつがあり、國枝理事、竹下事務局長、熊田監事をはじめ、学内関係者約30名の同席のもと看板上掲を行いました。

また、本オフィスは、TV会議システムを完備しているため、国内連携機関や7カ国に展開する名古屋大学海外拠点・事務所との相互交流を促進するハブ機能を有したサテライトオフィスとしても期待されています。

平成26年春の叙勲・褒章受章者決まる

－本学関係者3名が喜びの受章－

平成26年春の叙勲及び褒章の受章者が発表され、本学関係者では次の方々を受章されました。

瑞宝章は、国家又は公共に対して功労のある方のうち、公

務等に長年にわたり従事し、成績を上げた方に授与されます。

紫綬褒章は、学術、芸術上の発明、改良、創作に関して事績の著しい方に授与されます。

【叙勲】

〔教育研究功労関係〕

瑞宝中綬章

木下 宗七 名誉教授（経済学部）

瑞宝中綬章

高木 不折 名誉教授（工学部）

【褒章】

紫綬褒章

佐藤 健一 大学院工学研究科教授

下駄の鼻緒奨学金授与式を挙

下駄の鼻緒奨学金授与式が、4月18日(金)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。

下駄の鼻緒奨学金は、学術憲章の基本理念及び寄附者の意向に基づき、本学の学部又は研究科に在学する人物で、成績が優秀でありながら経済的な理由により修学が困難な学生に対して、その学修・研究等の活動を奨励するために



記念撮影

平成22年度に設立されたものです。

受賞者は4名(日本人学生2名、外国人留学生2名)で、授与式では奨学生採用通知書が授与されました。

授与式の中で、学生支援担当の國枝理事から「学生時代に下駄の鼻緒を切らし困っていた本奨学金の寄附者に、下駄の鼻緒を譲り渡した通りがかりの女性がかけた、『お礼は自分ではなく次に困っている人に返してください』との言葉の通り、寄附者の理念を引き継ぎ、社会に還元していく精神、奉仕の精神、互いに助け合う精神を忘れずに、学業や研究に一層励んでいただきたい」と祝辞があり、受賞者としての自覚を深めました。

授与式終了後に行われた國枝理事及び奨学金選考委員会委員と受賞者との懇談会においては、終始なごやかな雰囲気の中で、勉学内容や研究内容、進路等について活発な意見交換が行われ有意義な会となりました。

X線CT検査における患者の被ばく線量評価と医療放射線防護

大学院医学系研究科助教
藤井 啓輔



図1 左から小児1歳, 6歳, 成人体型ファントム

CT画像からデジタルファントムを構築し、コンピュータ上で被写体およびCT装置の幾何学的配置や撮影条件を設定し、モンテカルロシミュレーション計算を行うことで、被検者個々の線量を評価したいと考えています(図2)。

実測およびシミュレーション計算で得られた線量値は、患者被ばく線量の管理や放射線影響を評価する際の基礎データとして役立つと考えられます。また、CT検査時の画質についても解析を行うことで、画質と線量との関係性を評価し、年齢や体型に即した放射線防護策を検討したいと考えています。

近年、X線CT装置は飛躍的に進歩し、広範囲な部位を短時間で撮影できるようになり、病変の存在診断や質的診断等を目的として、多くの医療施設でCT検査が行われています。また、国連科学委員会(UNSCEAR)2008年報告書によれば、単位人口当たりのCT装置台数は日本が世界第1位であり、CT検査はより身近な診断検査となっています。その一方で、CT検査は他の放射線診断検査に比べて高い線量を伴うことが知られており、過剰な被ばくを受けないように患者の体型に即して最適な線量で検査が行われる必要があります。そのためには、各医療施設でCT検査時における患者の被ばく線量がどの程度なのか、その実態を把握することが必要となります。

CT検査における被ばく線量評価では、撮影部位ごとに患者体内の各組織・臓器の吸収線量(臓器線量)を求めることが重要ですが、実際の人体で臓器線量を直接測定することはできません。そこで、本研究では、成人および小児体型を模擬した人体ファントム(図1)内の各組織・臓器位置に小型線量計を設置した線量計測体系を構築しました。これまでに、複数の医療施設に各施設で日常的に使用しているCT装置および照射条件で、このファントムを撮影することで、代表的な体型における臓器線量データを取得しました。

また、最近のCT装置では、患者の体型に応じてX線量を調節する自動露出制御機構(Automatic Exposure Control; AEC)が搭載されており、患者の体型によって被ばく線量は異なると考えられます。そこで、今後は、患者の

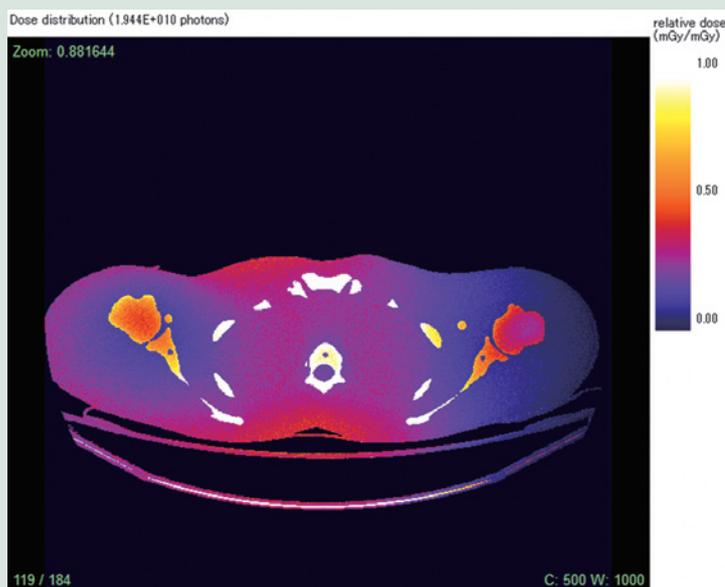


図2 シミュレーション計算で得られた成人ファントム(胸部)の線量分布の例

近未来型モビリティのすがた

森川 高行 大学院環境学研究科教授

最近、車の自動運転がマスコミでもよく話題になります。安倍内閣でも日本の成長戦略の柱の一つとして自動運転の技術開発と公道実証実験が挙げられています。行き先を告げると勝手に連れて行ってくれる、究極の自動運転は昔からSFや漫画の世界で頻りに現れてきました。世界で話題のGoogle Driverless Carはこれに近いものと思われれます。アメリカのカリフォルニア州やネバダ州で走行実験を続けていましたが、どこまで現在の社会で受け入れられるのかはまだ分かりません。

日本でも専用レーンでの自動隊列走行は約20年前から実験に成功しています。2005年の愛知万博では、トヨタ自動車が開発した自動隊列走行のバスが会場内で実際に多くの観客を運んでいました。昨年NEDOが行った実験では、時速80km・車間距離4mのトラック隊列走行を成功させています。車間距離はレーダーで、横方向は白線認識で行い、前の車の制動情報を後ろの車に伝えることで、同じタイミングで加速・減速ができることが車間距離を短くできるポイントです。国土交通省では「オートパイロットシステム」という名前で、高速道路における自動運転の検討を始めていますが、そこでは一般車両との混在交通を目指しています。私は、新東名・名神高速道路を6車線化してそこに大型車自動走行専用レーンを整備することの方が優先順位が高いと考えています。それが実現した場合、自動運転される大型車だけでなく、一般レーンから大型車が少なくなることで一般車も走りやすくなります。当研究室が行ったシミュレーションによると、新東名・名神の自動走行専用レーン整備によって走行便益（時間短縮）だけで年間700億円の効果があることがわかりました。それだけでなく、大型車による事故の

減少や、車間距離短縮による空気抵抗減少がもたらす燃料削減効果なども大きいと思われます。日本の技術力を世界に示す格好のチャンスなので、できる限り早く実現して欲しいものです。

近未来型モビリティはもちろん車の自動走行だけではありません。車のエンジンも、ガソリン・軽油を使った内燃機関から、次第に電動系に変わって行くでしょうし、電気も燃料電池によって車内で作られるようになっていくかもしれません。大きさに関しても、平均乗車率が1.5人/台程度であることを考えると、もっと小型の車の方



写真1 セグウェイ共同利用のデモ

がエネルギー効率や道路の利用効率もよくなるため、超小型車が増えて行くでしょう。一人乗りの超小型車を「パーソナルモビリティ」と呼ぶことがあり、立ち乗り型の「セグウェイ」もその一つです。当研究室では、2011～12年度に東山キャンパス内でセグウェイの共同利用実験を行いました。キャンパスの3カ所に1台ずつのセグウェイを配備し、乗車講習を受けた教職員の方々に自由に使用いただきました。目的地での駐車がしにくいと、貸出時間を最大2時間/回としたため、会議や講義での移動に使うのは少し難しいようでしたが、書類を届けたり、巡回したり、また昼休みに楽しんだり、1回当たり平均3kmの利用がありました。移動支援ロボットとも言える、これらの立ち乗り型パーソナルモビリティは、乗っていること自体の楽しさが大きく、観光や警備などの周遊・巡回に最も適していることが分かりました。

その他、現在も東山キャンパス内で電動アシスト自転車のシェアリング（デポ4箇所、全37台）を行っています。「自己保有から共同利用」ということもこれからのモビリティのキーワードになると思います。共同利用のためには情報通信技術（ICT）の活用が鍵になります。使いたい場所での利用可能性のチェック、予約、借り出し、決済、管理などがICTの活用で非常に簡便になるからです。日本でもカーシェアリングの利用者が急増しています。



写真2 電動自転車共同利用のデポ

このように、近未来型モビリティのキーワードは、自動化、小型化、共有化などがあり、これにより利便性、安全性、省エネルギー性などが向上します。名大は、昨年度に文部科学省の革新的イノベーション創出プログラム（COI STREAM）に採択され、「いつまでも生き活きと活動し暮らせる社会とモビリティ」という研究開発に産学連携で取り組むことになりました。名古屋発の近未来型モビリティを創出する拠点となることが期待されています。

京都大学工学部卒業、同大学院修士課程修了、マサチューセッツ工科大学（MIT）大学院博士課程修了（Ph.D.）
京都大学助手、名古屋大学助教授、MIT 客員准教授を経て2000年から名古屋大学教授
専門は、交通計画、ITS（高度道路交通システム）、消費者行動論
主な著書に「交通行動の分析とモデリング」（共編著）、「道路は、だれのものか」

もりかわ たかゆき



44. 減災館 (Disaster Mitigation Research Building)



本建物は、東山キャンパスの四谷通沿いに立地しており、敷地形状を活かした特徴的な建物形状となっています。南海トラフの巨大地震等による災害の軽減を目指した減災の先端研究に加え、分野間・地域・産学官民の融合による研究・教育を推進し、地域社会の減災実現に寄与することを目的とした建物です。加えて、地域における減災・防災人材育成を目的とした一般市民向けのイベントを多く行うなど、防災意識の啓発の場としても役割も担っています。

また、災害時には本学のみならず、この地域にとっての災害対策拠点として自治体との相互補完や情報収集・発信を行うこととしており、巨大地震発生時においても事業継続可能な建物となる必要があるため、免震建物としていることに加え、災害時にライフラインが遮断した場合でも約1週間の事業継続が可能となるような設備が整った建物となっています。

このように平常時には減災先端研究と防災人材育成の場として、非常時には本学の災害対策拠点本部と地域における災害情報収集・発信の場として、それぞれの役割を担う重要な建物となっています。

1階・2階は減災・防災の啓発の場と位置付け、広く市民に公開することとしています。1階の減災ホールでは平常時は講義やセミナーなどを行い、非常時は名古屋市や愛知県のサテライトオフィスとして活用され、この地域の情報収集・発信の拠点となるよう計画されています。壁面を利用した収納スペースも多く設けており、災害時用の備蓄品置場として使用されます。2階床は一部吹抜けとなっており、1階との一体感を創出しています。2階には災害対策室が設けられてお





り、災害時には災害対策本部の活動拠点としての役割を果たします。研究スペースは3・4階に設けられており、多分野連携型研究の推進の場となっています。5階にある屋上実験室は下部躯体との間に免震装置が設置されており、建物全体の揺れを吸収する制振装置としての役割を果たしています。また、起震装置も併設されており、家具転倒実験や避難行動実験など、様々な実験が可能となっています。

免震性能としては、建物の揺れる範囲を90cmまで可能とするなど、南海トラフ巨大地震のような極めて稀に発生する地震にも対応する計画としました。

災害時における約1週間の事業継続を可能とするための最も大きな対策として、非常用自家発電装置と1週間分の燃料を蓄えたタンクを設置し、災害時の活動に必要な電力の供給を行うこととし

ています。その他、想定した活動人員に対し必要な量をまかなうことができる給水槽・排水槽を設けるなど、あらゆる対策を取っています。

省エネルギーに対する取り組みも様々行っており、特徴的な取り組みとしては、西面に日射遮蔽のためのルーバーを設置しており、熱負荷による影響を低減しているほか、共同溝から予冷予熱した外気を取り込み、空調負荷の軽減を図っています。

減災館が名古屋大学の顔となる建物の一つとなるとともに、この建物によって減災・防災の意識向上につながっていくことを望んでいます。平成26年5月以降に一般開放されますので、ぜひ減災館に立ち寄って「減災」にふれていただければ幸いです。

(施設管理部)



1	3	4
2	5	6

- 1 建物正面
- 2 外観（西面）
- 3 減災ギャラリー
- 4 減災ホール
- 5 減災ライブラリー
- 6 災害対策室

第2回 ITbM 国際シンポジウムを開催

●トランスフォーマティブ生命分子研究所

トランスフォーマティブ生命分子研究所 (ITbM) は、5月12日(月)、野依記念学術交流館において、第2回 ITbM 国際シンポジウムを開催しました。ITbM は、世界屈指の分子合成力を推進力として、生命科学・技術を根底から変える「トランスフォーマティブ生命分子」を生み出すことを命題とした国際研究所です。昨年と同様、動植物生物学と合成化学・触媒化学の分野で世界をリードする5名の研究者を講演者に招き、講演を行いました。

濱口総長の開会のあいさつに続き、WPI プログラムディレクターである黒木登志夫日本学術振興会学術システム研究センター相談役が、WPI プログラムの趣旨説明を行いました。その後、伊丹 ITbM 拠点長から、ITbM を支えるコンセプトである「ミックス」によって、合成化学、動植物生物学、計算科学を巻き込んだ融合研究が生まれ、成果を生み出していることが報告されました。このコンセプトは、従来の研究室間の壁をなくし、一つ屋根の下で合成化学者、動植物生物学者、計算科学者が日夜ともに研究する空間を作り、日常的にサイエンスの話を議論することによって、新しいアイデアが生まれ実行に移すことを目指すものです。このアイデア「ミックスコンセプト」を実践する場所をミックスラボと呼んでいます。

その後、ロバート・キャンベル アルバータ大学教授、デイビッド・ネルソン ジョージア大学教授、デイビッド・クレイク クイーンズランド大学教授、サクボク・チャン KAIST (韓国科学技術院) 教授、シカゴ大学教授である山本 尚中部大学教授の5名の招待講演者によって「分子」

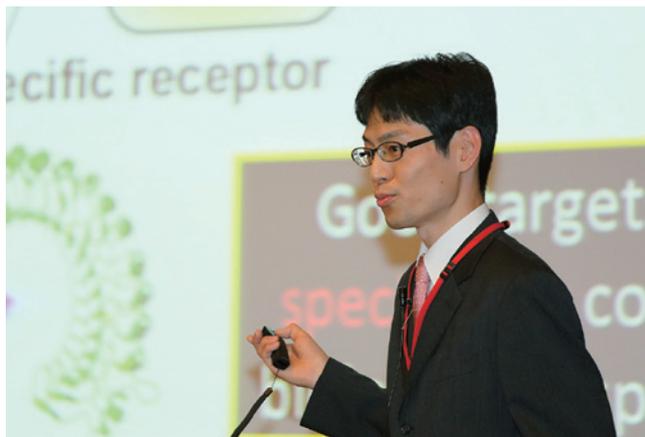


記念撮影

をキーワードとした世界最先端の研究成果が披露されました。

また、量子化学専門の横川大輔特任准教授、植物発生遺伝学専門の打田直行特任准教授、植物分子生理学専門の中道範人特任准教授、動物分子生理学専門の廣田 毅特任准教授、有機合成化学専門の大松亨介特任講師ら ITbM を代表する若手研究者が、自身の研究、そして ITbM での融合研究について講演を行いました。

国内外から参加した300名余りの研究者・学生は、生物学、化学そして計算科学と多岐にわたる講演に真剣に聞き入りました。細胞機能を明らかにする蛍光技術、植物の寄生、生物時計、C-H 活性化反応などについて分野の壁を飛び越えて白熱した議論を展開し、活気溢れるシンポジウムとなりました。



講演する打田特任准教授



講演する中道特任准教授

工学研究科コミュニケーションデザイン室プレート上掲式を挙

●大学院工学研究科

大学院工学研究科は、4月17日(木)、工学部5号館において、コミュニケーションデザイン室プレート上掲式を挙行しました。同室は、工学部・工学研究科と社会とのコミュニケーションをマッチアップすることを目的に4月1日付で新たに設置されました。

式典では、松下同研究科長、中村同室長によるプレート



松下研究科長(左)と中村室長(右)によるプレート上掲の様子

の上掲後、松下同研究科長からコミュニケーションデザイン室への期待を込めた激励のあいさつがありました。

現在、社会の中で大学が担う役割は広範にわたり、必要とされる情報の開示をはじめ、大学として伝えるべき情報の増加及び質の向上は、今や必要不可欠な取り組みとなっています。同室は、同研究科のパブリック・リレーション機能の研究実践部署として新たに開設されたもので、これは、国立大学の中でも先端的な試みとなります。

大学におけるパブリック・リレーションの対象は、すべてのステークホルダーに及びます。例えば、本学への進学を希望する受験生とその保護者・教員から、共同研究をすすめる機関、本学が持つ教育研究上の知見の生涯学習を希望する一般市民、そして卒業生・修了生を採用する産業界や研究機関まで、広範囲に至ります。昨今、大学の情報開示は活発になりつつありますが、私立大学に比べて、国立大学ではまだ不十分であるという指摘もあります。同研究科では、必要とされる情報開示に積極的に取り組み、コミュニケーションのあるべき姿を模索し、その手法の開発と実践を行うべく、様々な実験的な試みを展開していく方針です。

ダン・シェヒトマン特別教授による特別講演会を開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科は、5月12日(月)、IB電子情報館大講義室において、ダン・シェヒトマン イスラエル工科大学特別教授による特別講演会を開催しました。シェヒトマン特別教授は、1982年にAl-Mn合金から正20面体対称性を持つ電子回折図形を観測し、結晶でもアモルファスでもない従来にない構造を持つ物質を発見し、1984年に公表しまし

た。この発見はそれまでの結晶学の常識を覆す結果として大きな衝撃を与え、「準結晶」という新しい研究分野が開拓され、2011年ノーベル化学賞を受賞しました。「QUASIPERIODIC CRYSTALS - A PARADIGM SHIFT IN CRYSTALLOGRAPHY」(準結晶-結晶学のパラダイムシフト)をテーマに行われた講演には、学生、教職員、学外社会人など、約320名の参加がありました。

はじめに、堂寺知成近畿大学理工学部教授による準結晶の解説と研究の歴史に関する講演があり、その後、本学の研究者からも準結晶の研究についての紹介がありました。

続いて、シェヒトマン特別教授が講演を行い、イスラエルから研究サバティカルを利用して滞在した米国標準基準局で行った実験により、準結晶の発見に至った経緯や電子顕微鏡の観察をしながら記した実験ノートが果たした重要な役割について述べ、後半には、研究者としてのあるべき姿勢にも触れ、ユーモアを交えながら話しました。

講演後には、活発な質疑応答が行われ、参加者からは、「素晴らしいかった」、「良い刺激になった」との感想が多数寄せられ、大変有意義なものとなりました。



講演するシェヒトマン特別教授

環境学研究科附属持続的共発展研究センター設立記念シンポジウムを開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、5月9日(金)、減災館1階減災ホールにおいて、大学院環境学研究科附属持続的共発展教育研究センター設立記念シンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、減災連携研究センターとの共催で開催されたもので120名の参加がありました。

はじめに、久野環境学研究科長、濱口総長、浅田和伸文



パネルディスカッションの様子

部科学省高等教育局高等教育企画課長、谷津龍太郎環境事務次官及び三田敏雄中部経済連合会会長よりあいさつがありました。続いて林環境学研究科附属持続的共発展教育研究センター長より同センターの紹介が行われ、引き続き、持続可能な開発という理念に関する国際的枠組みを実践・展開するためには、大学によるグローバル人材育成と社会へのアウトリーチが必要であり、教育と社会連携事業を通じて、地球規模課題から地域密着課題までを対象にして貢献するのが同センターのミッションであるとの説明がありました。

その後、「持続可能な発展への理念から実践へーグローバル人材育成と大学社会連携のあり方ー」をテーマにパネルディスカッションが行われました。討論には、高瀬千賀子国連地域開発センター長、安成哲三総合地球環境学研究所長、山中光茂三重県松阪市長、浅田高等教育企画課長、谷津環境事務次官、伊藤範久中部経済連合会専務理事及び林センター長が参加し、大学に求められる人材育成と社会連携について活発な意見交換が行われました。

東海圏減災研究コンソーシアム第1回シンポジウムを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、4月25日(金)、減災館1階減災ホールにおいて、第1回シンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、同センターが所属する東海圏減災研究コンソーシアムの主催によるもので、同コンソーシアムは、東海地域の6国立大学(岐阜大学、静岡大学、名古屋大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、三重大学)の



シンポジウムの様子

防災関連センターが、防災・減災研究を推進し、安全安心な地域社会の実現を目指した連携を目的に昨年3月に設立されました。当日は、6大学の関係者や一般の参加者など、120名余りが参加しました。

昨年度に代表幹事を務めた福和減災連携研究センター長のあいさつに始まり、第1部では、6大学それぞれの活動状況の報告に続いて、コンソーシアムに設けられたハザード評価、被害予測、減災技術開発、地域防災力向上、人材育成活用、情報基盤整備という6つの専門部会の活動が報告されました。

第2部では、6大学から、南海トラフ地震の概要とその予測、巨大地震に対する超高層建物の応答評価、老人介護施設の被災シミュレーション、UAV(無人機)を用いたモニタリング、耐震補強した建物の地震被害、自主防災のための手法紹介、といった防災・減災に関わるバラエティに富む話題提供があり、活発な質疑・討論が行われました。

来るべき南海トラフ巨大地震に備えるため、各地域の防災力向上や、近隣の地域間の連携を図ることは重要な課題の1つです。同コンソーシアムの活動を通して防災・減災研究が進展し、東海地域全体で防災力が向上することが期待されます。

第101回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、5月14日(水)、減災館1階減災ホールにおいて、第101回防災アカデミーを開催しました。今回は、加藤孝明東京大学生産研究所准教授による講演「時代の潮流とこれからの防災まちづくり」が行われ、96名の方々の参加がありました。

加藤准教授は講演のはじめに、東日本大震災以降に特徴



講演する加藤准教授

的な社会の雰囲気として、「自然災害に対して絶対に安全でなければならないという考え方」、「自然災害からの安全は行政が確保しなければならないという雰囲気」、「災害対策において重要と思われる課題に焦点が当たらない」、「最大クラスを受け止める方法論がないまま、想定が計算されるという現状」、「想定に伴う不確実性や誤差が理解されていないという実態」といった5点の問題点を挙げました。その後、「防災の基本」として特に、自助・共助・公助の三位一体で進む防災対策は、「公助の言い訳、共助の自己満足、自助の無策」といった状況に陥る危険性もあり、地域の被災状況に関する共通認識、そして、役割分野・相互の責任に関する事前の合意の2点が重要であると説明がありました。

また、現代の潮流ともいえる財政難・低成長・少子高齢化などの社会状況の変化に対して、それぞれの地域で多様なまちづくりのモデルを考えていく必要があると言及しました。その中で、これからの防災まちづくりは、従来型の「行政への要求型」ではなく、防災・災害についての新しい価値観を上乗せした上で、「住民先行・行政後追い型」の防災まちづくりになるべきだとの指摘がありました。

ICCAE2014年度第1回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、4月14日(月)、農学部第6講義室において、2014年度第1回オープンセミナーを開催しました。今回は、2010年からフィリピンにある国際稲研究所（IRRI）において共同研究している国際農林水産業研究センター（JIRCAS）の林慶一氏が、地球規模の重要課題である気候変動下での稲作の安



講演する林氏

定生産を支援するために開発中の天水稲作版意思決定支援システム WeRise プロトタイプをインターネットを使って実演しました。

世界各地での激しい気候変動により気候予想が困難になってきている中で、雨水に頼らざるを得ない天水稲作農民は、高価な種子や肥料を無駄にしたり、収穫皆無などの大きな困難に直面しています。日本では灌漑水田が中心ですが、近年、水不足に陥ることが再三起こっています。灌漑には、施設整備や水の確保などに多額の費用が必要です。このような難しい条件下で、これまでの気象観測データに裏打ちされた天候の予測、気候変動や様々な土壌条件に対応した水稻の生育モデルを駆使した収量予測などを組み合わせた東南アジア向けの意思決定支援システムが構築されました。

参加者は留学生や海外からの研修員等学内外から30名弱でした。参加者は、WeRiseの受益者である農民への普及をどの様に進めていくのか、現在はインドネシアとラオスの2カ国が対象であるが、他の国に広めていく上での困難な点は何か、などについて議論を深めました。

ICCAE2014年度第2回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、4月22日（火）、農学部第6会議室において、2014年度第2回オープンセミナーを開催しました。今回のセミナーは、昨年度ICCAE客員准教授である桂圭祐京都大学大学院農学研究科附属農場助教を講師として迎え、「イネの好気土壌への適応性」の題目で開催されました。



セミナーの様子

講演では、灌漑畑条件における稲作生産性に関する研究成果が紹介されました。養水分を積極的に投入し、イネを畑条件で集約的に生産する灌漑畑稲作は、有望な節水栽培技術として期待されています。セミナーの中では、灌漑畑条件においてもインド型の短稈高収量品種を使うことによって1ヘクタール当り10トンを超える多収が達成可能であることが示されました。また、イネの好気土壌条件に対する作物生理的反応について、桂氏の研究成果に基づいた概説がありました。しかしながら、この研究は、まだ十分に行われておらず、集約的畑栽培で求められる品種特性や栽培管理技術については十分な知見が得られていないとの説明もありました。

講演後には、集約的な灌漑畑稲作の普及の可能性や好気土壌適応性に関わるイネの形質などについて、東南アジアやアフリカからの研修生を含む多数の参加者との間で活発な質疑応答が行われ、盛況なセミナーとなりました。

ミクロの探検隊®を開催

●博物館

博物館は、5月10日（土）、「ミクロの探検隊®-ホニュウ類の組織を電子顕微鏡でみよう」を開催しました。

「ミクロの探検隊®」は、博物館が平成19年から行っている電子顕微鏡を使用した体験型次世代教育で、毎回抽選で選ばれた参加者は、小学5、6年生と中・高校生が中心となっており、大学院医学系研究科附属医学教育研究支援センター分析機器部門と日立ハイテクノロジーズの協力を得て開催しています。今回は、観察の対象として、植物、動物（昆虫・ホニュウ類等）、化石など6種類を取りそろえ、リピーターも飽きないように工夫しました。



観察の様子

まず、玉ねぎの表皮を使って、標本を作成し、それを観察することで、生物顕微鏡の使い方を学習しました。次にあらかじめ用意されたラットの主な臓器組織の標本を生物顕微鏡で観察、各組織の構造や働きの説明を受けました。さらに、走査型電子顕微鏡を使用して、小腸、腎臓、気管を観察、撮影しました。同じラットでも、臓器によって組織・細胞の構造も全く違い、それぞれの働きによって構造が、より機能的に変化（分化）していることを学びました。また、参加者は、自らの手で電子顕微鏡を操作して撮影した写真を、記念品としてポストカードにしました。

また、同館では4月から実験室が新しくなり、一度に30名まで実験が出来るようになりました。さらに展示室からもガラス越しに実験風景が見られるようになり、来館者からも好評を得ています。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
1 黒川宏之理学研究科研究員らが火星は誕生から4億年で水が半減したという研究成果を発表	4.16 (水)	中日 (朝刊) 他2社 日刊工業
2 本学は米国トムソン・ロイターの引用回数が多い科学論文数に基づく日本の大学・研究機関ランキングで8位に入った	4.16 (水)	読売 朝日 (朝刊)
3 医学部附属病院は名古屋逓信病院内に「地域包括医療連携センター」を設置したと発表	4.16 (水)	中日 (朝刊)
4 現代日本誤百科 (969):「殴られた殺害現場」町田 健文学研究科教授	4.16 (水)	中日 (朝刊)
5 私の履歴書⑮:石田退三さん 豊田章一郎全学同窓会会長	4.16 (水)	日経 (朝刊)
6 減災館にて愛知県が市民や企業の担当者など地域防災の担い手向けの講座を行う	4.16 (水)	日経 (夕刊)
7 第18回博物館特別展「人類史上画期的な石器-名大のアフリカ考古学と南山大の旧石器コレクション-」開催:3月4日～7月12日	4.16 (水)	朝日 (夕刊)
8 揺らぐ9条 平和主義は? 力では何も解決できない 益川敏英本学特別教授	4.17 (木)	中日 (朝刊)
9 愛敬浩二法学研究科教授や池内 了本学名誉教授など学者たちが「立憲デモクラシーの会」を設立	4.17 (木)	中日 (朝刊)
10 医学部附属病院が混合診療の実施病院として取り上げられる	4.17 (木)	朝日 (朝刊)
11 現代日本誤百科 (970):「遜色がほとんどない」町田 健文学研究科教授	4.17 (木)	中日 (朝刊)
12 第44回名大カフェ“Science, and Me”「スマホと宇宙をつくるフォトカソード電子銃」開催:23日	4.17 (木)	読売
13 私の履歴書⑯:排ガス対応 豊田章一郎全学同窓会会長	4.17 (木)	日経 (朝刊)
14 大学図書館 火の車 附属図書館が電子版の契約を2000以上のタイトルすべての雑誌が閲覧できる契約から約370タイトルに絞込み、値上がりした他の雑誌の購入費用にあてていることが取り上げられる	4.17 (木)	朝日 (夕刊)
15 小児がん治療 地域一体 小児がん拠点病院として医学部附属病院が取り上げられる	4.17 (木)	日経 (夕刊)
16 私の履歴書⑰:石油危機 豊田章一郎全学同窓会会長	4.18 (金)	日経 (朝刊)
17 本学と大阪大学の研究グループは細胞間のすきまを密着させて制御する「クローディン」の分子構造を解明	4.18 (金)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 読売
18 私の履歴書⑱:工販合併 豊田章一郎全学同窓会会長	4.19 (土)	日経 (朝刊)
19 あいち Sports なび:硬式野球 七原優介さん教育学部4年生	4.20 (日)	読売
20 数理ウェブ:26日 大沢健夫多元数理科学研究科教授が「安定性と特異点」と題して講演	4.20 (日)	中日 (朝刊)
21 クローズアップ2014:臨床試験 不正防止へ検討会 パルサルタンの不正論文疑惑の厚生労働省検討委員長の森嶋昭夫本学名誉教授は「特定の企業が特定の大学に資金を出すのではなく、製薬業界全体で基金を作って中立的に配分していく制度が望ましい」と語る	4.20 (日)	朝日 (朝刊)
22 私の履歴書⑲:米国生産 豊田章一郎全学同窓会会長	4.20 (日)	日経 (朝刊)
23 大学トップがエール 濱口総長の入学式の式辞「海外に出て孤独の中で自分の力を試して」が取り上げられる	4.21 (月)	日経 (朝刊)
24 私の履歴書⑳:良き企業市民 豊田章一郎全学同窓会会長	4.21 (月)	日経 (朝刊)
25 藤田祐一生命農学研究科准教授などの研究グループはらん藻が窒素固定するのに必須のたんぱく質を作り出す遺伝子を発見	4.22 (火)	読売
26 現代日本誤百科 (972):「雪の勢いが止まらず降り続けている」町田 健文学研究科教授	4.22 (火)	中日 (朝刊)
27 私の履歴書㉑:英国生産 豊田章一郎全学同窓会会長	4.22 (火)	日経 (朝刊)
28 紙つぶて:地球のいとこ発見 杉山 直理学研究科教授	4.22 (火)	中日 (夕刊)
29 韓国海洋警察職員徐文鍾氏元本学留学生在が韓国南西部沖のフェリー沈没事故の調整役として奔走している	4.22 (火)	中日 (夕刊)
30 現代日本誤百科 (973):「完璧に忘れた」町田 健文学研究科教授	4.23 (水)	中日 (朝刊)
31 私の履歴書㉒:レクサス 豊田章一郎全学同窓会会長	4.23 (水)	日経 (朝刊)
32 ひと:日本生協連からILO(国際労働機関)に派遣された堀内聡子氏国際開発研究科修士	4.23 (水)	朝日 (朝刊)
33 本学が24日に東京オフィスを開設することについて渡辺理事は「名大の研究を全国に発信したい」と語る	4.24 (木)	毎日 (朝刊)
34 現代日本誤百科 (974):「二度とやめて」ください 町田 健文学研究科教授	4.24 (木)	中日 (朝刊)
35 「和式」で学ぶ モンゴル高校 教育学部附属高等学校と新モンゴル学園の姉妹校提携が取り上げられ三小田博昭同教授は「世界の中の問題を一緒に考えることで、刺激を受けてもらえれば」と語る	4.24 (木)	朝日 (朝刊)
36 私の履歴書㉓:経団連会長 豊田章一郎全学同窓会会長	4.24 (木)	日経 (朝刊)
37 名古屋大学医学部 大学の要の学部としての発展	4.24 (木)	毎日 (朝刊)
38 私の履歴書㉔:愛・地球博 豊田章一郎全学同窓会会長	4.25 (金)	日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成26年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
78 濱口総長は「持続的共発展教育研究センター」の新設について「持続性は21世紀の大きなテーマ。若い世代に理想と使命感を喚起する場になると期待している」と語る	5.10 (土)	中日 (朝刊)
79 博物館特別講演会「南山大学人類学博物館マリンガー・コレクションの石器資料」開催：17日	5.10 (土)	中日 (朝刊)
80 法科大学院の2014年度入試の状況で本学が取り上げられる	5.10 (土)	読売
81 読売テクノ・フォーラム第20回ゴールド・メダル賞：「被子植物の受精メカニズムの解明」東山哲也トランスフォーマティブ生命分子研究所教授	5.11 (日)	読売
82 鮎京理事はアジアの研究拠点について「アジアの途上国は経済が発展する一方で商取引や知的財産保護の法整備が追いついていないため、専門家要請のニーズが高い」と語る	5.12 (月)	中日 (朝刊)
83 本学と河合塾が共同で大学受験生向け特別授業を開き福和伸夫減災連携研究センター教授が講義	5.12 (月)	毎日 (朝刊)
84 現代日本誤百科 (981)：「ゴールを切る」町田 健文学研究科教授	5.12 (月)	中日 (朝刊)
85 廣井 悠減災連携研究センター准教授は日本火災学会での調査で「津波の浸水予測域でLP ガス使用禁止や石油タンク地下埋設といった対策が必要」と話す	5.12 (月)	毎日 (夕刊)
86 現代日本誤百科 (982)：「最高潮に盛り上がる」町田 健文学研究科教授	5.13 (火)	中日 (朝刊)
87 医人伝：寺崎浩子医学系研究科教授	5.13 (火)	中日 (朝刊)
88 上口美弥子生物機能開発利用研究センター准教授などのグループは植物の成長を調節する新しいメカニズムを発見	5.13 (火)	中日 (朝刊)
89 紙つぶて：海外旅行にご用心 杉山 直理学研究科教授	5.13 (火)	中日 (夕刊)
90 インタビュー WHILL 株式会社最高開発責任者内藤淳平氏本学卒業生	5.13 (火)	中日 (朝刊)
91 濱口総長が本学の学生の留学を年間1000人にする目標を掲げる	5.14 (水)	朝日 (朝刊)
92 福和伸夫減災連携研究センター教授が名古屋市立名塚中学校で行われた防災講演会で講演	5.14 (水)	中日 (朝刊)
93 現代日本誤百科 (983)：その作品で「著名な美術館」町田 健文学研究科教授	5.14 (水)	中日 (朝刊)
94 愛知学長懇話会主催 ESD 大学生リレー・シンポジウム 災害と持続可能性「地域協働で減災ルネサンス」 in 名古屋大学	5.14 (水)	朝日 (朝刊)
95 時のおもりの科学・技術の軍事利用の危機 池内 了本学名誉教授	5.14 (水)	中日 (朝刊)
96 山中章弘環境医学研究所教授はレム睡眠とノンレム睡眠の両方を調節する神経を同定	5.15 (木)	中日 (朝刊)
97 本学が「持続可能な開発のための教育 (ESD)」の考え方を学ぶプログラムを導入していることが取り上げられる	5.15 (木)	中日 (朝刊)
98 現代日本誤百科 (984)：「釣りに造詣が深い」町田 健文学研究科教授	5.15 (木)	中日 (朝刊)
99 囲碁・将棋 大学で白熱授業 本学の特別講義「囲碁の世界」について教養教育院担当者は「判断力や分析力、集中力など論理的思考が身につく。教養科目にふさわしい」と語る	5.15 (木)	朝日 (夕刊)

平成26年度名古屋大学公開講座

■ 全学企画

テーマ：おもしろいことは「境界」で起こる

開催日時：平成26年8月19日(火)～10月16日(木)の火・木曜日の全15回
午後6時～午後7時30分

会場：経済学部第2講義室

募集定員：200名

応募資格：満18歳以上の方

受講料：9,460円

申込期間：平成26年6月16日(月)～7月22日(火)

ホームページ：<http://www.nagoya-u.ac.jp/international/lecture/open-lecture/>

申し込み・問合わせ先：研究協力部社会連携課「公開講座」係 TEL：052-789-5969



日程	テーマ	講師
8/19	21世紀を拓く革新的ナノ物質は宇宙から	理学研究科 篠原 久典 教授
8/21	リアル世界とサイバー世界の境界消失?	情報基盤センター 高倉 弘喜 教授
8/26	温室効果ガス (CO ₂) は誰が排出しているのか	国際開発研究科 藤川 清史 教授
8/28	國酒は国境を越えて:「國酒プロジェクト」を題材に日本の進むべき道を考える	経済学研究科 佐藤 宣之 教授
9/2	ヒトの個性や能力を分子レベルから理解したい	創薬科学研究科 藤吉 好則 特任教授
9/4	善と悪の境界に—アフリカ社会の妖術信仰—	文学研究科 佐々木重洋 准教授
9/11	人体の内と外との境界:皮膚のバリア機能と皮膚を舞台とする疾患	医学系研究科 秋山 真志 教授
9/16	植物と病原微生物の「境界」で起こっていること —互いの存亡をかけた戦い—	生命農学研究科 川北 一人 教授
9/18	外交は何と何の「際(きわ)」で展開するか:日本政府による対日イメージ向上の試みを事例に	国際言語文化研究科 井原 伸浩 准教授
9/25	超ひも理論が予言する境界としての宇宙	多元数理科学研究科 白水 徹也 教授
10/2	オトナになりたい! 血の塊から人間へ、コドモからオトナへ—イスラム社会の教育と産育儀礼	教育発達科学研究科 服部 美奈 教授
10/7	安全と危険の境界—人間に直接サービスをするロボットをテーマに	工学研究科 山田 陽滋 教授
10/9	宇宙と地球大気との境界を探る:オーロラと宇宙の嵐	太陽地球環境研究所 関 華奈子 准教授
10/14	都市の「境界」と郊外の形成	環境学研究科 片木 篤 教授
10/16	性の境界と法—性同一障害を中心に—	法学研究科 國分 典子 教授

■ ラジオ公開講座

テーマ：おもしろいことは「境界」で起こる

開催期間：平成26年7月6日(日)～9月7日(日) 毎週日曜日午前11時～午前11時30分

放送局：東海ラジオ放送 (1332KHz)

問合せ先：研究協力部社会連携課「公開講座」係 TEL：052-789-5969

日程	テーマ	講師
7/6	21世紀を拓く革新的ナノ物質は宇宙から	理学研究科 篠原 久典 教授
7/13	リアル世界とサイバー世界の境界消失?	情報基盤センター 高倉 弘喜 教授
7/20	温室効果ガス (CO ₂) は誰が排出しているのか	国際開発研究科 藤川 清史 教授
7/27	國酒は国境を越えて:「國酒プロジェクト」を題材に日本の進むべき道を考える	経済学研究科 佐藤 宣之 教授
8/3	ヒトの個性や能力を分子レベルから理解したい	創薬科学研究科 藤吉 好則 特任教授
8/10	善と悪の境界に—アフリカ社会の妖術信仰—	文学研究科 佐々木重洋 准教授
8/17	植物と病原微生物の「境界」で起こっていること —互いの存亡をかけた戦い—	生命農学研究科 川北 一人 教授
8/24	超ひも理論が予言する境界としての宇宙	多元数理科学研究科 白水 徹也 教授
8/31	オトナになりたい! 血の塊から人間へ、コドモからオトナへ—イスラム社会の教育と産育儀礼	教育発達科学研究科 服部 美奈 教授
9/7	性の境界と法—性同一障害を中心に—	法学研究科 國分 典子 教授

■部局企画

平成26年6月1日現在

日程	講座名等	会場	定員	受講料	問い合わせ先
7/19(土) 13:00~16:00	第13回 Jr. サイエンス教室	理学部 G 館 1 階 生物実習室 (113号室)	20名	無料	Jr. サイエンス教室担当係 jr-sci@gene.nagoya-u.ac.jp
8/2(土)~8/3(日) (2日間同一コースを受講) 10:00~16:00	公開実験講座2014 「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」	生物機能開発利用研究センター 及び理農館の各研究室	15名 (申込者多数の場合には抽選)	2,500円	生物機能開発利用研究センター事務室 ホームページ: http://bbc.agr.nagoya-u.ac.jp/ TEL: 789-5194又は、TEL: 789-5838
8/5(火)~8/7(木) 及び 8/25(月) 9:30~17:00	数学アゴラ (夏季集中コース)	多元数理科学研究科 多元数理科学棟509号室	約100名	無料	愛知県立高校以外の人 名古屋大学大学院多元数理科学研究科 教育研究支援室数学アゴラ係 TEL: 052-789-5994 愛知県立高校の生徒: 愛知県「知の探究講座」 TEL: 052-954-6786
10/25(土) 11/1(土) 11/8(土) 12/20(土) 9:30~17:00	秋の公開講座		約100名	無料	
8/16(土) 8/17(日) 8/18(月) 9:30~17:00 6時間 (昼休み1時間、 休憩計30分) 計18時間	英語の書記体系 ー発音と文字と綴りについてー	国際開発研究科	20名	8,200円	文系総務課総務グループ (国際開発研究科担当) TEL: 052-789-4952 FAX: 052-789-2666 ホームページ: http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/ に公開講座の申し込み方法を公表予定
8/18(月) 8/19(火) 8/20(水) 10:00~17:00	公開セミナー 「天文学の最前線」	名古屋市科学館および 名古屋大学	300名	学生500円 一般1,000円	大学院理学研究科 素粒子宇宙物理学専攻宇宙物理研究室 (U研) 「公開セミナー」係 TEL: 052-788-6188 申し込み: 往復はがきによる又は ホームページ: http://www.ncsm.city.nagoya.jp/study/astro/seminar/
9/20(土) 10/11(土) 10/18(土) 14:00~16:00	柔道寝技教室	第4体育館	30名程度	無料	瓜谷 章 (柔道部部长) TEL: 052-789-3797
9/26(金) 13:00~14:30	先端技術公開セミナー	情報科学研究科棟1階第1講義室	120名	無料	大学院情報科学研究科 広報渉外委員会 庶務掛 TEL: 052-789-4716 gsis@is.nagoya-u.ac.jp ※事前申込み不要
9/26(金) 15:00~17:30	基盤研究公開セミナー	情報科学研究科棟1階第1講義室	120名	無料	
平成26年9月~27年3月の 土曜日 (7回程度) 10:00~12:00	オープンカレッジ 自由奔放サイエンス	経済学部カンファレンスホール	300名	無料	経済学研究科エクステンション・サービス TEL: 052-783-8900 FAX: 052-783-8905 ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp (キタン会)
10/10(金) 10/17(金) 10/24(金) 18:30~20:00	観光振興と地域開発 (理論と国内外の事例)	国際開発研究科 8階多目的オーデトリウム	50名	無料	文系総務課総務グループ (国際開発研究科担当) TEL: 052-789-4952 FAX: 052-789-2666 ホームページ http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/ (7月中旬予定)
12/6(土) 13:30~16:15	平成26年度 鶴舞公開講座	中央診療棟3階講堂	200名	無料	医学部・医学系研究科総務課総務掛 TEL: 052-744-2040 FAX: 052-744-2785 iga-sous@adm.nagoya-u.ac.jp
12月中 (予定) 13:00~17:00	第14回公開セミナー	名古屋大学内を予定	参加自由	無料	施設事務室 jim@gene.nagoya-u.ac.jp
平成27年1/10(土) 13:30~16:30 (予定)	地球水循環研究センター 公開講演会 「環境災害リスクと地球水循環 研究」(仮題)	名古屋大学シンポジオンホール	100名程度 (事前申込み 不要)	無料	名古屋大学地球水循環研究センター センター長秘書 羽賀さおり TEL: 052-789-3459 ホームページ: http://www.hyarc.nagoya-u.ac.jp/japanese/02activity/sympo.html (予定)

※各公開講座については、<http://www.nagoya-u.ac.jp/international/lecture/open-lecture/> に最新情報を掲載しています。

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月4日(火)～7月12日(土)
場 所: 博物館特別展示室
時 間: 10:00～16:00
休 館 日: 日・月曜日
入 場 料: 無料

第18回博物館特別展
「人類史上画期的な石器—名大の 아프리카考古学と
南山大の旧石器コレクション—」



[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

4月10日(木)～7月31日(木)
(期間中の木曜開催)
場 所: 環境総合館 1階レクチャーホール
時 間: 17:50～19:20
定 員: 100名
対 象: 学生、一般
参 加 費: 5,000円 (愛知県内の学生は無料)

続・持続可能な社会VII
—持続可能な開発のための教育 (ESD)—

内 容: 世代間の公平性としての環境・資源の問題を中心に講義を進め、SDを担う人材を育成し愛知・名古屋を世界のESDの拠点にしていくことを目的とする



[問い合わせ先]
愛知学長懇話会事務局 052-747-6587

6月9日(月)～8月27日(水)
場 所: 博物館野外観察園
セミナーハウス 2階
時 間: 10:00～16:00
休 館 日: 土・日・祝日、8月14日～18日
入 場 料: 無料

野外観察園セミナーハウス サテライト展示
「ボタニカルアートと写真による観察園の植物」

テ ー マ: 「IV—夏の植物」

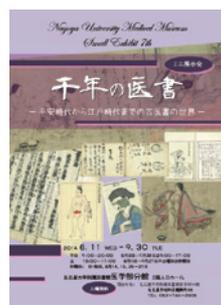


[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

6月11日(水)～9月30日(火)
場 所: 附属図書館医学部分館
2階入口ホール
時 間: 9:00～20:00 (平日)
(8/8～9/30の平日は9:00～17:00)、
13:00～17:00 (土曜日)
休 館 日: 日・祝日、
8月9日～9月27日の土曜日、
8月14日、15日、25～29日
入 場 料: 無料

附属図書館医学部分館第7回ミニ展示会
「千年の医書—平安時代から江戸時代までの
古医書の世界—」

内 容: 「医心方」、「病草紙」、「傷寒論」、「捷徑医筌」、「蔵志図」、「解体新書」、「解体約図」など、古医書の歴史を語る上で極めて重要な史料 (一部覆刻版) を展示



[問い合わせ先]
附属図書館医学部分館 052-744-2505

6月21日(土)、7月5日(土)
場 所: 理農館 3階335号室
時 間: 10:00～15:00

ビジネス人材育成センター 平成26年度前期 B 人セミナー

テ ー マ: 「ベンチャー企業研究の方法と求められる『人材』—バイオ業界を中心に—」、「検査業界に就職して—外資系? 海外ポスドク? 自らの経験をふまえて—」(6/21)
「博士の新しいキャリアパス リサーチ・アドミニストレーター (URA)」、「博士人材が持っているべき素養・素質について考える—自己の強みを意識し、表現するスキルを習得しよう—」(7/5)

[問い合わせ先]
社会貢献人材育成本部
ビジネス人材育成センター 052-747-6490

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**6月21日(土)、6月28日(土)、
7月5日(土)**

場 所：博物館 3階講義室
時 間：10:30~12:00
定 員：80名
参 加 費：無料
対 象：一般

達人（研究者）と話そう おもしろ博物館

講演題目：「風車の過去・現在・未来」(6/21)
講 演 者：石田幸男（国際教育交流本部特任教授）
講演題目：「ロボットと暮らす日が来るか」(6/28)
講 演 者：西堀賢司氏（大同大学特任教授）
講演題目：「石は語る」(7/5)
講 演 者：足立 守（PhD 登龍門推進室特任教授）



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

6月21日(土)

場 所：理学部 B館 5階 B 5講義室
時 間：13:00~
参 加 費：無料

理学研究科物理系研究室紹介・大学院入試説明会、研究室訪問

内 容：研究室紹介、大学院入試説明会、研究室訪問

[問い合わせ先]

理学研究科物理事務室 052-789-2876

6月24日(火)

場 所：情報基盤センター 4階演習室
時 間：13:00~14:30
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

平成26年度第3回情報連携統括本部公開講演会・研究会

内 容：情報技術の最新動向について

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

6月27日(金)

場 所：減災館 1階減災ホール
時 間：13:00~17:30（予定）
定 員：100名

減災連携研究センター 減災連携シンポジウム（仮）

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

6月28日(土)~1月31日(土)

場 所：豊田講堂、
減災館 1階減災ホール、他
時 間：9:15~17:00
定 員：500名
参 加 費：防災基礎研修1日
+各コース2日間で3,000円、他

平成26年度防災人材育成研修「防災・減災カレッジ」

講 演 者：福和伸夫（減災連携研究センター教授）、他
内 容：防災基礎研修



[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

6月28日(土)

場 所：文系総合館 7階
カンファレンスホール
時 間：13:30~16:00
対 象：一般
参 加 費：無料

国際言語文化研究科シンポジウム
**「テレビ会議システムで世界とつながる：
有効なグローバル人材育成法の構築」**

講演題目：「A TV Conference system across Asian institutions:
A trial of project-based SLA」
講 演 者：鈴木繁夫（国際言語文化研究科教授）、
マーク・ウィークス（同准教授）
講演題目：「グローバル人材育成プログラム成功の核心からみた
テレビ会議システム」
講 演 者：小野 博氏（福岡大学客員教授）
講演題目：「グローバル人材育成ワークショップの仕掛けと成果
からみたテレビ会議システム」
講 演 者：北 浩一郎氏（株式会社 LbE Japan 代表取締役）



[問い合わせ先]

国際言語文化研究科
教授 鈴木繁夫 052-789-5704

7月4日(金)

場 所：IB 電子情報館 2階大講義室
時 間：13:00~18:00
定 員：150名
対 象：一般
参 加 費：無料

エコトピア科学シンポジウム 第1回エネルギーシステムシンポジウム
「持続可能な社会のためのエネルギーシステム」

講演題目：「名古屋大学エコトピア科学研究所エネルギーシステム研究部門（第6期）の活動方針」
講 演 者：舟橋俊久（エコトピア科学研究所寄附研究部門教授）
講演題目：「持続可能な社会のためのエネルギーシステム」
講 演 者：仁田旦三氏（東京大学名誉教授）
講演題目：「再生可能エネルギー発電予測の必要性と動向」
講 演 者：杉本重幸氏（中部電力株式会社）
講演題目：「コミュニティエネルギーの実証試験」
講 演 者：是石 純氏（トヨタ自動車株式会社）
講演題目：「アンシラリーサービスとデマンドレスポンスの今後」
講 演 者：浅野浩志氏（電力中央研究所社会経済研究所副研究参事）
講演題目：「スマート社会のための雷保護システム」
講 演 者：関岡昇三氏（湘南工科大学教授）

[問い合わせ先]

エコトピア科学研究所
真鍋勇介 052-789-3141

7月5日(土)

場 所：文系総合館 6階、7階
時 間：13:00~15:30
参 加 費：無料

国際言語文化研究科 2014年度オープンキャンパス

内 容：研究科・講座・コース紹介、進学相談会、大学院生による
ポスター発表・インフォメーションコーナー



[問い合わせ先]

文系事務部教務課
国際言語文化研究科担当 052-789-4881

7月12日(土)

場 所：国際開発研究科棟
時 間：11:00~16:00
参 加 費：無料

国際開発研究科 オープンキャンパス2014

内 容：留学生相談、施設見学（図書室、言語情報処理室）、スライド上映、
大学院生による研究科紹介、全体説明会、専攻別説明会と個別相談、
展示

[問い合わせ先]

国際開発研究科
opencampus@gssid.nagoya-u.ac.jp

7月19日(土)

場 所：減災館、ES 総合館
時 間：13:30~17:00
対 象：一般
参 加 費：無料（意見交換会は
非会員・学生：1,000円）

名古屋大学協力会講演会
「迫りくる南海トラフ巨大地震を克服する」

講演題目：「南海トラフ巨大地震を知る：基礎から最新の科学的知見まで」
講 演 者：鷺谷 威（減災連携研究センター教授）
講演題目：「歴史に学ぶ防災論：関東地震と東南海地震」
講 演 者：武村雅之（同寄附研究部門教授）
講演題目：「減災館を活用し南海トラフ地震の減災対策を進める」
講 演 者：福和伸夫（同教授）
内 容：講演、施設見学



[問い合わせ先]

名古屋大学協力会事務局
052-744-1987

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

7月22日(火)～11月15日(土)

場 所：博物館 2階展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

**第19回博物館特別展
「絹谷幸太・創知彫刻」**

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

7月26日(土)、8月23日(土)

場 所：博物館 2階実験室、展示室
時 間：10:00～15:30
参 加 費：50円(保険料)
定 員：各21名
対 象：小学5年生以上、一般

ミクロの探検隊[®]

テ ー マ：「観察園のムシ」(7/26)、「雑木林のムシ」(8/23)
内 容：東山キャンパス構内で各自ムシを採集、実体顕微鏡や走査型電子顕微鏡を使用し微細構造の観察をしながら分類や働きを学ぶ



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

7月31日(木)

場 所：豊田講堂、シンポジオン
時 間：13:00～17:10
参 加 費：無料

**第1回名古屋 COI 拠点公開シンポジウム、
第2回社会イノベーションデザイン学センターシンポジウム**

内 容：名古屋 COI 拠点の概要および取り組みについて広く社会に紹介する

[問い合わせ先]

未来社会創造機構研究支援室
052-788-6056

名大トピックス No.253 平成26年6月16日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

表紙

全面改修により白基調の外観となった中央図書館
(平成26年5月16日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>)でもご覧いただけます。

146 名大の学風「自由闊達」の語源

名大の学風を一言で表現する「自由闊達」という言葉は、とくに最近よく使われ、今や完全に定着した観があります。単純に言えば、この言葉は名古屋大学学術憲章から引用したのですが（「自由闊達な学風の下…」）、その語源についてはもう少し複雑な経緯があります。

名古屋大学学術憲章は、松尾 稔総長時代の2000（平成12）年に、全国に先駆けて制定されたものです。しかし、制定当初の学術憲章には、「自由闊達」という用語は使われていませんでした。学術憲章に「自由闊達」が盛り込まれたのは、この言葉を多用した平野眞一総長時代末期の2009年2月のことです。

また、1987（昭和62）年に多くの教職員や学生の署名によって採択された名古屋大学平和憲章にも、この言葉が見られます。ただ、そこでは「自由闊達で清新な学風」とされ、「自由闊達」が一枚看板ではありませんでした。

ところで、平和憲章が採択された時の総長で、学生及び

教員として名大草創期の20年をすごした飯島宗一総長が、『名古屋大学学報』に「学長就任にあたって」と題する短い文章を寄せています。

そこには、創立されたばかり名帝大は、厳しい戦時下であったにもかかわらず「学問振興のエネルギーと、学の総合への情熱がみなぎって」おり、戦争直後は建物もお金も食べ物すらない時代であったものの、キャンパスには希望があふれており、自分の学生時代の青春の記憶も重ね合わせて、「自由で活達な名古屋大学の建学の気風を想起」との感慨が述べられています。平和運動家としても著名な飯島総長の存在が平和憲章の背景になったことも考えると、「自由闊達」の語源として注目されます。

もっとも、さらに以前から、「自由闊達」は名大の学風を示す言葉として使われていたと言う方もおられます。語源を特定するのは大変ですが、何か情報をお持ちでしたら、ぜひ大学文書資料室までお寄せください。



学長就任にあたって

飯島 宗一

このたび、石塚先生の後をうけ、名古屋大学長に就任することとなりました。責任の重いことを痛感し、微力ではありますが、大学のため渾身の努力をいたしたいと覚悟しておりますので、皆さんの御鞭撻を賜りたいと思います。

私は、昭和17年に、当時名古屋帝国大学として創設されたばかりの、あたらしい総合大学に入学しました。きびしい戦時中ではありますが、学問新興のエネルギーと、学の総合への情熱がみなぎっていたように思います。そして、間もなく終戦をむかえ、名古屋大学は、第八高等学校、経済専門学校などを包摂するとともに、文科系、社会科学系諸学部をも整備し、総合的



1	2	3
4	5	

- 1 飯島宗一（1922-2004）。第8代総長として、1981年7月から1987年7月までその任にあった。名大の卒業生としては初めての総長となった。
- 2 『名古屋大学学報』第213号（1981年7月）。もっともこの文章で飯島総長は、「若々しく自由な学風」とも述べている。
- 3 1942年に入学した飯島総長が医学部学生とし学んだ名古屋帝国大学医学部（現在の鶴舞キャンパス）。しかし、その後の空襲によって多くの建物を焼失した。
- 4 飯島総長は医学部では病理学専攻であった。写真は名帝大の病理学実習の様子（ただしこの写真は医学部ではなく臨時附属医学専門部のもの）。
- 5 医学部助教授時代の飯島総長（1958年医学部卒業アルバムより）。

